



定價券

中外新聞

別段



西垣文庫
文庫 10
7330



特 文庫10
7330

別段新聞

戊辰五月十六日

一昨日
俣守し留む

大總督府より左の通りは内達ありしよし風聞の
徳川亡遺の悪徒共上野山内へ屯集し警衛を名とし僧侶
を威靡し暴激の所業有之といへども寛宥の由所置を以
て度々散去の俣は撫諭とる在は処門主を抱依し抗命の
次第叛逆顕然不為得止不日誅鋤の思召は間諸門
市在取締向嚴整に相心は出師の由沙汰可相待旨内
に仰出は事

西垣文庫

辰五月

各藩隊長中

總督府 參謀

○
昨十五日朝未明より太鼓の音処々聞えて官軍得出し相成り此門々橋々皆ノ切とあり出入を止めらる間も無く砲声少く相きこえ湯嶋通り出火あり此頃中の大雨にて十分迄あり有之折柄亦れど手過ちの出火もあつたり何れも只事ならずと思へども往來留められど火元見の者を出る事も叶はず只相あつまりて此頃中の風聞を語り合ひ空しく出火の方角を詠め居たり

或と言ふ昨夜何國の兵とも知らず千五百人程千住口より江戸へ入込たり夫故戦争始まりたるならんと或と言ふ此程上野山内屯集の兵士錦の旗葵の紋の旗などを拵へ戦争の用意頗りありと或と言ふ當時江戸は府内に在て義を結ひ相盟約するの諸隊游撃隊銃隊撤兵隊を暫く言えず彰義隊純忠隊精忠隊盡義隊松石隊卧龍隊萬字隊水心隊其他諸國の脱走兵士所々潜伏し事を計る者幾萬人あるを知らず其徒一時相響應するよ於て如何なる事變を生せんも計り難くと衆説紛々更定論無し
其時一人の來客あり曰諸公の話皆信するよ足らず昨日前

文の如く上野屯兵は追討の俊彌以て諸藩の各隊へ布告し
成さる事既に明りし聞えしを參政一翁殿筑前守殿を初
め諸役人衆大に憂慮し。 静寛院宮様 天璋院様の御直書
を持ち今曉未明に 大總督府へは猶豫の俊出願し相成り
し時すてはおくれて最早官軍上野に於て戦を開きし跡
に成とりとは是のみを實説ふり後の成行を如何とも知らず
と云ふ

うくて此日も大雨止まず砲聲屢々轟き火勢益々盛んして
老弱婦女難を逃れて道路よさまよふ者衰みの聲街市に滿
つ然れとも皆狼狽して逃れ來れる者のみふれを今日の様

子を問へとも一人として慥に答ふる者無し

出火の場所を上野山下湯島天神の邊廣小路池の端仲丁下
谷邊谷中邊九五ヶ處に火の手上りすさまじき事いそん
方無し兩國橋を切落し大砲打掛くべき間立退きし松の
為知ありて兩國近邊の者俄に諸方へ立退き混雜す柳橋を
既に切落しとりと云ふ

夕方成て官軍追々歸陣し砲聲全く止み人々少く安堵
の思ひをさす

火事を益々をけし上野山内にも火の手起り中堂は本坊
悉く焼失す宿坊も半を焼失せしよし

山内屯集の兵何方へ立起きしや 御門主様もいまと落
着を聞かず

今朝上野邊より來りし者の話を聞けし廣小路片側焼失仲
町大抵焼失ししる由山下を雁鍋の邊より東側の小屋敷焼
失し廣徳寺前少く類焼す

廣小路邊より山内も死骸六十余人有り其外火災も依て怪
我せし者且雙方の怪我人多く有るべし追て委しき報告を
得て書載すべし

同日晝過大砲數發南方も聞こえし右を何方の船もや蒸
氣船一艘品川へ入津せり

昨日の戦ひ大雨にて雙方共難戦なりしが官軍の方より追
て新手を入替く攻立けるも屯集の兵を應援無く遂に
敗走し及ひける大砲小銃分捕頗多し

團子坂の方類焼死亡最多き由

昨日黄昏吾妻橋の上にて戦ひ有りしと見へて橋上も鮮血
おひと、し流れ鐵砲玉なども橋の邊に落散居しりと淺
草邊の者來り話せり兩國藏前邊もて砲聲を聞きしが其
根子を詳ならずと云

今朝王子の方にて又一戦有りし由彼方より來りし百姓途
中にて捨ひしりとして鐵砲の玉皮を持ち來れりシンチウ黄銅にて製

一とる管よて至極精巧なる者あり是まで未見當らざる品
とて勿論舶來の品あり定めて官軍の内精巧新式の銃を所
持する者有りと見へたり

附 施條銃新論 二卷西洋各國施條銃異同を比較し

圖を以て製式を示すの書あり 近日出來

今日公家衆一騎上野へ往きて巡見し玉ふ官軍あまゝ警衛
す

東照宮御靈屋を先く火災を免れ玉ふ

今日晝後 大總督府の印鑑又を田安殿一橋殿の印鑑所持

いと一はむと出門とく差支無く通行相叶い由

300